

球磨川 環境守ってこそ

ダム治水 三者三様でも…

専門家の意見一致

知事聴取

蒲島郁夫知事は11日、球磨川の治水対策について、ダム治水に異なる立場をとる3人の河川工学者から意見を聴いた。3人は、川辺川ダム建設を巡ってさまざまな意見を述べたが、球磨川の自然環境への配慮を求める点では一致した。

【1面参照】

ダムに限界を訴える省の解析結果を疑問視。人吉地点の流量を過小評価し、川辺川ダムの効果を過大に算定している可能性がある

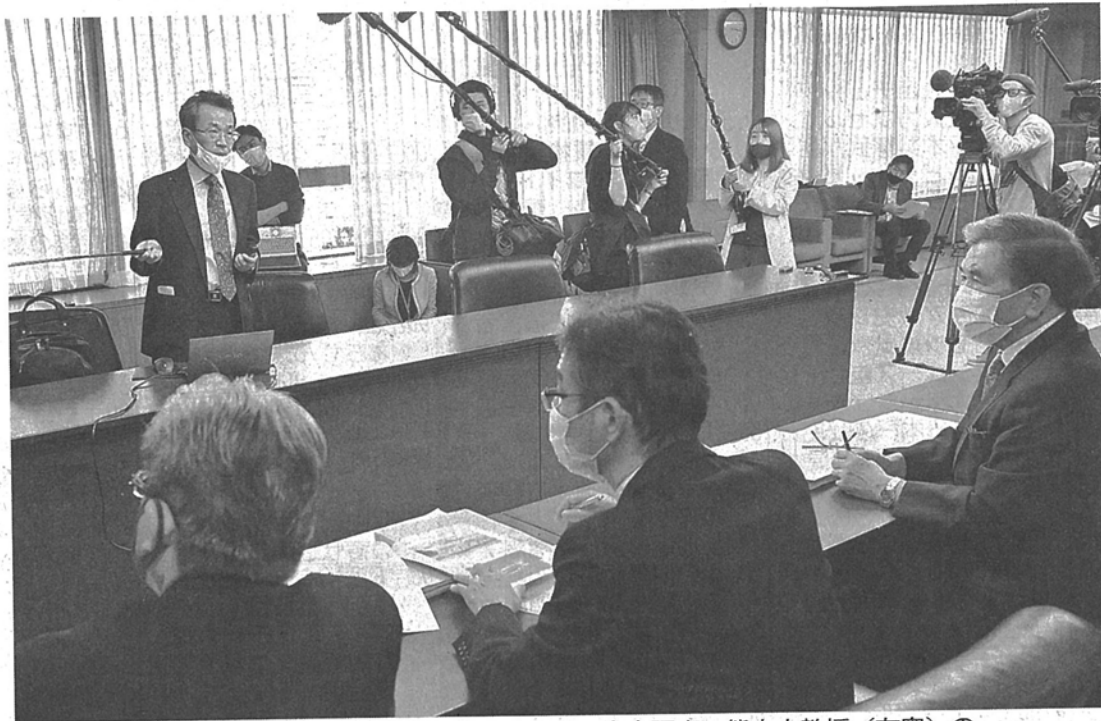
ムでは他の支流が原因となる被害は防げず、球磨川流域で今回犠牲となった50人のうち「ダムがあれば救えたのは数人だ」とした。

さらにも環境負荷は避けられないと強調。あらかじめ目標水位を設定する河川整備ではなく、できる対策を積み重ねながら「避難すること」で命を守り、失われた財産は国全体の公的補償で対応するしかない」と訴えた。

市房ダムが今回、2万立方メートルの流出をくい止めた点も評価。「もし下流に流れ出れば、被害はさらに拡大した」と指摘

各地で「流域治水」のアドバイザーを務める九州大の島谷幸宏教授(65)は、水田の貯水機能を最大限利用する「田んぼダム」をはじめ、地域ごとに小さな対策を重ね、「流域全体でゆっくりと水を流す」対策を提案した。

終了後、蒲島知事は「生命財産を守り、球磨川の恵みも維持できる、関係者が受け入れ可能な方針を示すのが知事の責任だ」と力を込めた。(太路秀紀)



球磨川流域の治水対策を検討するため、大本照憲・熊本大教授（左奥）の意見を聞く蒲島郁夫知事（右）＝11日午後、県庁（池田祐介）

一方、河川の流速の研究を続ける熊本大の大本照憲教授(65)は、川辺川ダムのプール機能は大きいとしつつ、「建設するならば、できるだけ清流を残すべき

2020
熊本豪雨

した。流下能力を上げるため、人吉市の中州にある中川原公園のスリム化も提言。土砂ではなく越流した水だけが水田地帯に流れ込む、加藤清正の治水にならった「堤」の整備も促した。

「生命財産を守り、球磨川の恵みも維持できる、関係者が受け入れ可能な方針を示すのが知事の責任だ」と力を込めた。(太路秀紀)